

しんぶん かわまち

第10号

発行集 わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編集 地域情報紙編集委員会

わがまちの顔

日本画家 久野 千代子さん



「日本画は、西洋画が『印象の絵画』と言われるのとは対照的に『精神の絵画』と言われるています。見たままを写し取る写実的な『面』で構成するのではなく、描こうとするものの本質が持つ美しさを『線』で表現する絵画なのです。対象物を観察し、性質を追求して煮詰めていく工程が重んじられるので『精神の絵画』と言われるゆえんなのです。」

現在のささくれだった時代に一服の清涼剤のような日本画に対する美意識を久野千代子女史は、このように語っています。

日本画は、明治時代に独特の技法・形式・様式を確立させた絵画です。経験と技法による複雑な工程が多く、心・技とも精緻が必要不可欠なのです。

久野女史は、静岡で生まれ三歳で中国安徽省に移住します。

幼児から画才が顕著で、父親が「千代子は将来絵描きに」の期

待に比例して頭角を表します。同地で久野慶治氏（昨年五月に逝去された元多摩川二丁目町会長）と結婚後も絵画を続け、内地に引き揚げたのは戦後の昭和二十一年のことでした。

昭和三十七年、日本画の巨匠で創造美術の谷文兆の流れをくむ松永光玉画伯に出会い、その人柄と初めて接した日本画に感動・魅了され師事し、これを境に日本画を意識し人生の転機になりました。

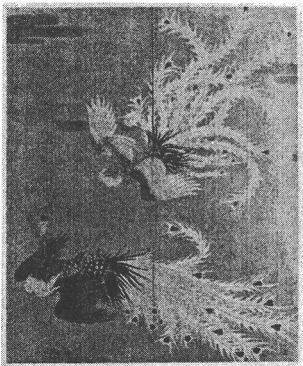
昭和四十四年、第二十二回上野美術館の創造美術展に初出品、入選、本格的に画家に。以後、平成十五年の五十六回展まで連続三十五回出展し、同展の三賞と言われる創造美術展大賞・東京都知事賞・文部大臣賞を受賞し、その他入賞多数になります。現在、会友と同時に審査員を務めています。

一方、新宿小田急デパートで開催される新世美術展でも、昭

和四十九年、第十五回展より平成十四年の第四十三回展まで連続二十九回出品し、各賞を受賞しています。現在、福井県高岡美術館所蔵の「コスモス」は、同地での新世美術展の際、当時の市長から絶賛を受け、所望された作品です。これらの作品のほとんどが百号（葉書百枚分の大きさ）で、その精力的な大作業意欲には瞠目に値します。その間、渋谷区立の松涛美術館日本画教室で十年以上の講師を務め、また、洗足・恵比寿教室で個人レッスン等を持っていました。

「私の創作意欲を駆り立てた原動力は、主人の存在そのものでした。」と語るように、良き理解者であるご主人の死はショックであり、目下充電中とのこと。一日も早い復帰を期待します。

（取材 滝口・市石委員）



第45回記念創造展 瑞祥

本日休診

井伏鱒二

三雲病院（当駅より北三丁）
 顧問 医学博士 三雲八春
 院長 医学博士 三雲伍助
 産婦人科主任 三雲伍助
 内科主任 宇田恭平
 （入院随意）

こんな看板が、最近、蒲田駅前
 の広場のはずれに立てられた。
 大きな立看板である。以前、戦
 争前にも同じ場所に「三雲産婦
 人科医院―院長医学博士 三雲
 八春」という小型の立看板が出
 してあった。それは戦災のとき
 火をかぶって、焼けトタンになっ
 たのを誰か持つて行った。無論
 戦災では三雲産婦人科医院自体
 も焼け失せた。今度、もと通り
 に建築して、「面目を改めて、
 「三雲病院」と再出発したわけ
 である。
 井伏鱒二の「本日休診」の書

き出しです。ここに出てくる三
 雲病院は、蒲田に実在する病院
 をモデルにして書かれています。
 このお医者さんは南雲今朝雄さ
 んといい、御園一丁目一番地
 （現在の西蒲田七丁目二五番付
 近）に南雲病院を開業しており
 ました。



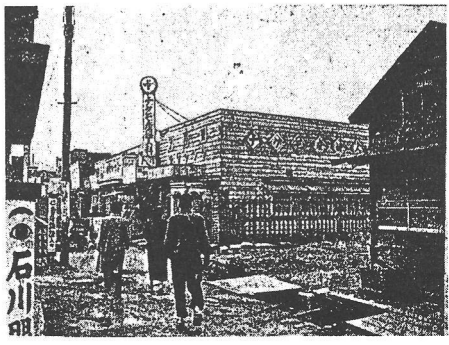
井伏鱒二『本日休診』

映画 本日休診

松竹映画「本日休診」は井伏
 鱒二の作品を脚本家の齊藤良輔
 が巧みにアレンジし、渋谷実が
 監督したもので、同監督の代表
 的な作品であります。
 東京下町の貧しい人たちの住
 む町で開業している医者の子雲
 先生（柳永二郎）を主人公とし

て繰り広げられる、ユーモアと
 ペーソスとヒューマニズムの庶
 民スケッチ集であり、終戦後、
 ようやく最悪の生活から回復し
 つつある時期の人々の生活を活
 写した傑作でした。

映画のあらすじは、三雲医院
 が開業一周年で、三雲先生以外
 の従業員数人が慰安旅行に出か
 け、本日休診の札を下げて老人
 の三雲先生が一人で留守番をす
 ることになりました。ところが、
 そこに朝から晩まで、つぎから
 つぎへと患者や事件が持ち込ま
 れて、休診どころか多忙な一日
 となってしまうました。



井伏氏が訪れた頃と思われる医院

暴行された家出娘、十六年前
 の診察代を払いに来た女、喧嘩

で怪我をした与太者、急患の妊
 婦、入院代を踏み倒す患者、最
 も印象的な出来事は、勇作（三
 国連太郎）という青年の発作で、
 彼は陸軍の将校として戦争に行
 き、気がおかしくなつて帰つて
 きました。発作を起こすと町の
 人たちに号令をかけ、敬礼を強
 要する。特に害はないのですが、

そのたびに人々は悪夢のような
 戦争を思い出させられる。三雲
 先生には彼を治療することはで
 きない。ただ優しく付き合つて
 やるだけです。ラストシーンで
 また発作を起こした勇作に、三
 雲先生は大声で号令をかける。
 夕暮れの空を飛んでいく雁の群
 れを少年飛行兵達の編隊に見立
 てて敬礼させるのでした。涙ぐ
 んで敬礼する勇作に合わせて、
 ちようどその街角に居合わせた、
 愛すべき登場人物たち一同が、
 雁の群れに一斉に敬礼をします。

ドタバタと、そして、のどか
 な温かい一日の本日休診でした。
 貧乏だが良い時代、良い下町人
 情、人間にとって何が大切かを
 教えてくれ、心のなかに沁みこ
 んで来る映画です。

豪華な脇役陣を紹介しますと、
 鶴田浩二、淡島千景、十朱久雄、
 岸恵子、望月優子、佐田啓二、

市川翠仙、長岡輝子他と多彩な顔ぶれです。

南雲病院

今回、取材で南雲今朝雄先生のご長女真理絵さんにお会いして、いろいろとお話をお聞きすることが出来ました。

南雲病院は、昭和十一年に蒲田駅東口、松竹撮影所の近くに開業しました。当時の松竹の女優さん田中絹代、川崎ひろ子など有名な女優、俳優さんたちをよく診察したそうです。しかし、そこは戦災で焼けてしまい、戦後二十二年に蒲田駅西口に移転再開しました。

先生は平成八年に九七歳で他界されましたが、お母様は現在九七歳でお元気に西蒲田のマンションでお暮らしだそうです。

先生は静かで穏やかな性格で、贅沢する事もなく、お子様たちは勿論、患者さんにもとても優しい方だったそうです。また先生は文才に長けておられ、医療のかたわら常に自ら筆を執り、一人の医師として自分の目で見た蒲田の裏町、患者さんの様子を書き留めていました。それを佐々木久子さん主宰の「酒」という雑誌に寄稿し、まとめたものが「実録本日休診」として出

版されました。

また二行詩という短歌を長い間書き続けて、文集をふるさと群馬の吉岡町に作った「南雲文庫」に展示してあるそうです。そこには真理絵さんの大好きな二行詩「ふるさとの山河何も語らずと語りかける」の歌碑が建てられているそうです。

井伏鱒二

小説家、翻訳家。一八九八年広島県福山市に豪農の次男として生まれる。一九一九年、早大文学部入学。一九二八年「鯉」を「三田文学」に発表。一九三八年「風来漂民奇譚ジョン満次郎漂流記」にて直木賞を受賞。「ドリトル先生」シリーズでの翻訳の印象が強いが、同時に世情を骨太に描くリアリズムの作家でもある。一九五〇年「本日休診」で読売文学賞。一九六六年「黒い雨」で野間文芸賞。一九九三年、九五才で死去。
(取材 柏村、石渡、福岡委員)

御園神社

文・菅原翠石

大田区蒲田は、円墳すなわち「塚」の多い地域だった。東口

から言えば、六郷の八幡塚、雑色の入道塚、出村の天神塚。西口なら、西蒲田の女塚、道塚子とり塚、まだまだ探すとどっさりあるはずだ。

明治の神仏分離令によって蒲田で一番の出世頭は御園神社であろう。祭神は猿田彦のみこととアメノウズメのみこと、などと、もったい振って称しているが、もとはオシャモジさまと言って御園村の畑の隅っこにチョココンとあった小さなホコラだった。タン切り飴のようにノドに良いとカゼヒキが、たまに御参りに来る程度であったオヤシロが、俄然、見直されたのが明治五年、文明開化の波に乗って始めた鉄道施設工事のおかげであるから、文明開化の申し子みたいな神社と言いたい。

鉄道工事は、品川と横浜間を手掛けた。大田区の東海道すじの商店街の連中が猛反対をする。そこで政府は昔のお鷹場の原野に線路を敷いていった。

このとき今の蒲田駅、呑川よりに小古墳が三つあった。その墳墓を壊して線路を敷くにあたり、工事に駆り出された土地の農民らは、墳墓のタタリがあると恐れおののき蒼白とあいなる。

そこは鉄道院のおエラ方知恵者ぞろいであった。「何も心配することは無い、東京一という神主にお祓いを奉じてもらえばタタリなどは尻のカツパじや恐れることはない。」

てなことで、おごそかな祭文ノリトを歌うがごとき美声で唱えた。地元人夫らも、うっとり聞きほれ安堵感を得て働いたという。これには裏があった。神主は祭文語りの芸人、祝儀をたっぷり頂戴したそう。

そして古墳の発掘品は、近間にあるオシャモジさまへ合祀して御園神社と改名した。発掘品はたいした物でないらしく戦災で焼失、いまはない。

だが神社の存在は今では駅前の一等地。もちろん西口の商店主や住民が氏子。境内を整備、社務所を再建した。維持経費は社務所の間貸料で賄っている。祭礼は毎年夏休みに盛大におこなっている。

筆者は、新蒲田一丁目にお住まいの郷土史研究家で、歴史からんだ多くのエッセー等を執筆しています。



そして、自治会は今

御園自治会

川名 重士

当自治会は、JR蒲田駅西口より南へ約二〇〇メートル先に位置する。蒲田陸橋から環八蒲田歩道橋まで約五〇〇メートル、そこから南へ約一〇〇〜二〇〇メートルの狭い地域です。

今から五十年前、戦後の復興が進み落ち着いてきた頃、昭和二十八年地元有志の尽力で、御園二丁目自治会が結成されたと言われています。同年に新調した曳太鼓が自治会館に保管してあります。

その当時は、西蒲田八丁目町会と当自治会は、同じ自治会でした。その後、区画整理、やや並行して環状八号線の拡張も整った頃、昭和三十五年に話し合いで、環状八号線を境に二つの町会に分離し、同時に当自治会が創立しました。又、それ以前の昭和三十一年頃、既に倉庫があり使用していたと聞いています。数年後に、現在の御園自治会館に建て替え、約四十年の長きに渡り活動の拠点として利用してきます。

当地域は、京浜工業地帯に接し、城南地区にあつて、かつては活気に溢れた時代もありました。今は、企業も変化して、マンションや住宅も増え、JR蒲田駅や東急蒲田駅に近い住宅地帯として居住環境にも適しています。一方、環状八号線沿いは、近隣商業地帯の地の利があり、最近ではビルや事務所等の企業が増加しつつあります。

自治会は今、会館問題の課題に取り組み始めたところですが、昭和五十四年から約二十四年間継続している廃品回収があります。活動費をつくる目的で始めたそうです。婦人部が先頭に立って、毎月快い汗を流しています。

続いて、和気あいあい活動している自治会の御園有終クラブを紹介します。現会員数百十四名で内七割が女性で占めているそうです。今年、二名の女性が百歳を迎えました。自治会の誇りです。会の主な行事に敬老会と新年会があり、自治会館に集うのが楽しみだそうです。二泊三日の旅行会、演芸会等、多彩な活動を積極的にやっていると言います。又、自治会行事の防災防火運動、交通安全運動、防犯運動等の多くの協力があります。

事務局からのお知らせ

平成十四年三月一日発行の「かまにし17」第三号の特集で取り上げた『蒲西に住んだ無類派作家 坂口安吾』をシリーズ「蒲田と文学」その1として位置づけ、今回の『本日休診 井伏鱒二』を「蒲田と文学」その2として特集を組んでみました。

色々、調べてみると蒲田に関係ある作家が何人かいて、シリーズもので取り上げようというところで「蒲田と文学」と題しました。今後、何時掲載するかは決まっていませんが、期待してお待ちください。

編集員一同、期待に応えるために、今後も取材等に頑張つていきます。

編集後記

今回の「わがまちな顔」は、日本画家の久野さんを紹介しました。実際に目の前で、本物の日本画を見るときはなやかな線が、何か心に訴えてくる感じがしました。今回、掲載した作品の実物はカラーです。紙面の都合上、カラー印刷はできず、また、編集の腕の悪さもあり、作品の良さが伝わるか心配です。

また、今回初めて投稿による記事を掲載してみました。菅原さんの「御園神社」です。この情報紙も十号となり、多くの読者から感想やお叱り、今回のような貴重な文書等が数多く寄せられています。今後も機会がありましたら投稿文等を紹介していきたいと考えています。

今回の十号を節目に、新たな気持ちで次号に取り掛かりたいと思います。次号は、年が明けての三月一日発行となります。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29,504人
	女	27,282人
	計	56,786人
世帯	29,011世帯	

平成15年11月1日現在

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所 大田区西蒲田七十一-二一七 (三七三三) 四七八五